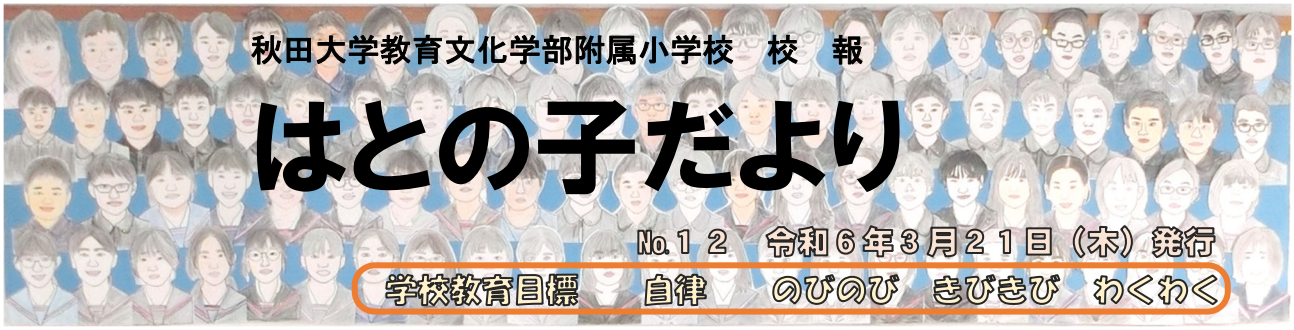

秋田大学教育文化学部附属小学校　校　報

はとの子だより

No.１２　令和６年３月２１日（木）発行

学校教育目標　自律　のびのび　きびきび　わくわく

はとの子の巣立ち　～通過儀礼としての卒業式～

「先生、校長先生の前に立った後って、礼をしてから前に出るのと、前に出てから礼をするのと、どっちが正しいんでしたっけ？」

卒業式があと数日に迫った６年生の教室で、何人かの子どもたちに尋ねられました。

「礼をする前に一歩前に進むと、どんな印象を与えるかな？」

そう尋ねると少し間があって、「失礼？」という答えが返ってきました。

「そう、早く証書をよこせって言っているような態度に見えてしまうかもしれないね」

この説明に何度もうなずいたあと、卒業証書授与の所作を仲間と繰り返し確かめていました。

卒業式から遡ること数か月、附属中入試に向けたオリエンテーションで「通過儀礼」について考える学習を行いました。面接での所作について、なぜそうするのか？ということに問いをもって臨み、「どうせ結果の如何に関わらず合格するんだから…」という緩みや甘えが生じないようにするためでした。

面接や卒業式、成人式、結婚式…、人間は生まれてから死ぬまでに様々な儀式を経験しますが、そこで求められる一定の所作については、あまりその意味を考えることなくやり過ごされがちです。中には形骸化し、省略されたりおざなりになったりしていくものもありますが、それでも最低限の礼は尽くして滞りなく終えることが重視されます。

一つ一つの所作には意味があり、その所作における振る舞い方に、その人の普段の生き方や考え方が表れます。３学期に国語で学習した狂言は、そのような行動様式が長く受け継がれた文化の最たるものです。

これらの儀式における所作を、その人間性の成長を伴うかたちでしっかりとやり遂げることで、社会を構成する一員として認められるようになる。それを「通過儀礼」と呼んでいます。

件のオリエンテーションではバヌアツ共和国の「元祖バンジージャンプ」成人式の動画を見せながら、「通過儀礼」は時として命がけで行われる場合もある、ということを話しました。しくじったり、逃げたりすると、そのコミュニティの一員として認めてもらえないことすらある、とも伝えました。

現代の日本に暮らす子どもたちからすれば、突拍子もない行為に思えてもおかしくないはずですが、なぜか６年生は、この時クスリとも笑わずに真剣に画面に見入り、話に耳を傾けていました。

数か月後の卒業式で、子どもたちは見事にこの「通過儀礼」をクリアしたように思います。いただいた証書を高々と掲げながら後ずさる動きなど、ぎこちなくも、誠実さが感じられる一つ一つの所作に、卒業への思いが伝わってきました。

卒業おめでとうございます。皆さんの前途に、明るい未来と大いなる幸せが待っていることを信じています。

校長先生の式辞

今年の冬は、例年になく雪が少なく、記録的な温かい日もありましたが、寒暖の差が激しく、体調管理の難しい日が今も続いています。それでも、３月になって、光の春というように、日々春の訪れを感じる季節になってきました。

この佳き日に巣立ちの時を迎えた８７名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。また、保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。２０１９年度末から続いたコロナ禍を乗り越えて、ほぼ以前と同様の１年間を過ごすことができ、今日この日を迎えられたことを、皆さんとともに喜びたいと思います。

さて、卒業生の皆さん。今、皆さんは卒業証書を授与されました。これは、皆さんの６年間の結晶です。一日一日の日々を６年間積み重ねてきて辿り着いた、皆さん達の成長の証です。

附属小学校での６年間を振り返れば、本当に色々な事があったと思います。修学旅行、わくわく班活動、はとの子運動会、はとの子学習発表会、そして何よりも日々積み重ねてきた授業と学校生活。どれもかけがえのない思い出として皆さんの中に残っているはずです。

こうした様々な活動や経験の中で、皆さんは、自分で考える力、発表する力、協力する力、思いやり、リーダーシップなど、たくさんの力を身につけてきました。これらは、まさに本校の教育目標である自律する力です。先行き不透明で不確実なこれからを生き抜くために必要となる力です。この６年間で身に付けてきた、こうした自律する力を基礎として、ますます成長していってください。この６年間、毎日毎日皆さんを支え続けてくれたご家族、お世話になった先生方、ともに過ごしてきた友だちへ感謝する気持ちを決して忘

れないでください。

　さて、そうした卒業を迎える６年生の皆さんに、一つお話をしたいと思います。それは、「幸せとは何か」ということです。皆さんは今とても幸せを感じていると思いますが、幸せって何でしょうか。もう３０年前になりますが、山田洋次という監督が１９９３年に作った「学校」という映画の中で、夜間中学校で学んでいる、年齢も、経験もばらばらな生徒たちが、最後に、授業の中で「幸せとは何か」を考える場面が出てきます。幸せというのは、お金持ちだとか、偉いといったことではなく、生きてて良かったと心から思えることであり、学校は、本当の幸せは何なのかを分かるために勉強するところだということが述べられています。
　また、２０１１年の東日本大震災の後、ナルトというアニメのエンディングテーマの歌詞ですが、「幸せなんて小さなスプーンいっぱいですくえるくらいで十分なんだ」（「真夜中のオーケストラ」Aqua Timez、作詞：太志・作曲：Aqua Timez）というフレーズがありました。最初聞いた時、大きな幸せではなく、小さな幸せで十分だという、この言葉に、震災の後だけに、私はとても大きな衝撃を受けました。

　今年に入っての能登の地震も、昨年の秋田市の水害も、また、各地の戦争などでの被災地の状況を見ていると、日常がいかに幸せに満ちているものであるかがわかります。健康も水も空気もなくなって初めて、そのありがたさに気づきます。家族も友人も同様です。幸せは日常の中にあふれているのに、いつもはそれに気づかずに不平ばかりを言っているのかもしれません。
　そして、誰しも、大きな幸せ、たくさんの幸せを求めがちです。しかもそれは往々にして、人に勝つこと、負けないこと、うらやましがられること、悔しがらせることであったりします。そうではなく、小さな幸せを大事にすること、求める幸せではなく、与える幸せを大事にするように心がけたいところです。
　考えてみると、幸せって、不安定で、はかないものです。でも、家族や友人、そしてみんなの幸せを願い、そのために努力しようとする自らの意思は確かなものであって、簡単に壊れるものでも､壊されるものでもありません｡先ほどのエンディングテーマは続けて、その小さな幸せを「分け合える人」がいることの大切さを歌っています。喜びは分かち合うことで二倍になり、苦しみは分かち合うことで半分になる、とも言います。出会いを大切にし、仲間を大切にし、家族を大切にしましょう。

　最後になりましたが、本日まで、様々な活動を通じて附属小学校を支えてくださいました保護者の皆様には、心より深く感謝いたします。今、保護者の皆様は、お子様たちが本校に入学したその日から今日までの日々を、まるで走馬灯に様に思い起こされているのではないでしょうか。小学校での６年間を経て、立派に成長した姿をお見せすることができたことに安どするとともに、心より感謝申し上げます。

　さあ、卒業を迎えた８７名のはとの子の皆さん、いよいよ巣立ちの時です。その翼を大きく広げ、大地をしっかりと蹴って、力いっぱい羽ばたいて飛び立ってください！
　私たちは、これからもずっと皆さんの成長を願っています。こらからの皆さんのさらなる成長と、すばらしい未来を祈念しまして、式辞とさせていただきます。

令和６年３月１５日
秋田大学教育文化学部附属小学校　校長　佐藤修司